クロマチン修飾:その再構成と機能解析

DNAメチル化やヒストン修飾に代表されるクロマチン修飾はエピゲノムの 頑強さや可塑性の鍵となっているが、その精密な再構成の難しさが長らく 機能解析を妨げていた。近年、化学・生化学の技術革新により、自在なヒストン修飾を含むヌクレオソームの再構成が可能になりつつある。本ワークショップでは種々のクロマチン修飾を解析する若手研究者の発表を通して、クロマチン修飾研究の将来を展望する。

[日時] 2016年 6月 9日(木) 9:00 ~ 11:30 [会場] 福岡国際会議場4F 412(D会場)

[プログラム]

■ UHRF1の同定からヒストンリジンの水酸化修飾の発見まで

鵜木 元香 (九大・生医研)



ポリコーム複合体によるエピゲノム制御

伊藤 伸介 (理化学研究所・IMS)

■ DNA脱メチル化制御機構の解析

高橋 沙央里(阪大・蛋白研)

- 化学合成ヒストンを用いたクロマチン修飾解析プラットフォームの構築 林 剛介 (東大・先端研)
- 人工触媒システムを用いたクロマチン修飾

川島 茂裕 (東大・院薬/JST・ERATO)

■ 「エピヌクレオソーム」の再構成と機能・構造解析

梅原 崇史 (理化学研究所・CLST)

オーガナイザー 梅原 崇史(理化学研究所) 鵜木 元香(九大・生医研)

写真:福岡城跡の桜祭り